

IV. 総目次（1982～2011）

一橋大学スポーツ科学研究室に所属するスタッフを中心に進めてきている共同研究。その活動の年次記録であり、研究の成果である『研究年報』の第1号が発行されたのが1982年。今回の発行で30号、つまり、30年という節目を迎える。学内予算によらず、スポーツ科学研究室のスタッフの自主的な取り組みとして継続して発行されてきたものであるが、これを機会に、これまでの『研究年報』、『一橋大学スポーツ研究』の目次を以下に掲げることにした。

30年という時間の経過の中で「転換点」ともいえるものがいくつかあった。ひとつは、名称変更である。第1号（1982）から第21号（2002）までは『研究年報』であったが、第22号（2003）から『一橋大学スポーツ研究』となった。「単なる『研究年報』では発行主体も内容も伝わりにくい」、等の議論を経ての変更であった（なお、この小文では、便宜上、「第～号」という表記を用いているが、通巻番号を付すようになったのは、この第22号（2003）からである）。もうひとつは、第23号（2004）から装丁を変え、カラー化した。同時に、英文の目次を裏表紙に記載しはじめた。

外部との関係でいえば、他大学等の研究機関各所に寄贈してきたが、第22号（2003）から国会図書館に寄贈するようになった。また、第24号（2005）にISSN登録をした。

以上の点は外形的な変化に属するものといえるが、内容面に関わって全体を通観するとき、共同研究を進める体制、その時代・時期のスポーツ状況の反映、時代を先取りしつつスポーツ研究をリードしてきたこと、等、いくつかの特徴を見て取ることができよう。

まず、第1号（1982）から第6号（1987）の時期までは、3グループ、ないしは2グループに分かれ、文字通りの共同研究体制でそれぞれのテーマに取り組んでいた。そのことも関係してか、掲載されている文章には、研究発表の概要のみならず、研究会や合宿での討論まで含まれている。また、『研究年報』の執筆は、発表者以外（おそらく当該発表の「司会」役）のスタッフが担当する形を取っている。こうした形に変化が現れたのが、第7号（1988）である。3グループ体制はこの時まで継続されているが、個々人のテーマ発表、そして、まとめ（執筆）も当人が行うというスタイル採るようになった（ただし、目次には執筆者名は記載されず、本文末にカッコ書きで記名されるというものであった）。そして、第8号（1989）になると、グループ体制ではなく個々のスタッフの研究発表、まとめ（執筆）も当人、そして、執筆者が明記されるという形になった。この形が現在まで踏襲されている。

特集テーマを一瞥すると、初期の『研究年報』は、1970年代の体育・スポーツ研究の集大成といえる『スポーツを考えるシリーズ』全5巻（大修館書店）の中で大きな役割を果たした本研究室のスタッフが、その成果をふまえつつ、継承発展を目指していたということができよう。「国民スポーツ」が継続的なテーマとして位置づけられていることは、そのことを示していると思われる。同時に、1980年代のスポーツ状況に対する共同研究のスタンスを表現するものといえよう。

共同研究の新たな展開については、「ポスト臨教審」（第7号、1988）、「大企業のスポーツ参入」（第9号、1990）、「スポーツの市場化」（第11号、1992）、など、その時期のスポーツ状況の特質を示すキーワードを特集テーマに取り上げていることに現れている。特筆されることは、現代のスポーツをとらえていく上での視角として「グローバリゼーション」に早い時期から注目していることであろう。第16号（1997）以降、継続的に特集テーマとして取り上げてきているが、あわせて、このテーマによる文部科学省の科学研究費を獲得し、研究成果の公刊へとつながっている。

「スポーツ社会学」の語句は、第12号（1993）と第15号（1996）に登場しているが、学内の組織転換にともなう学部・講座再編の議論が進む中で、「スポーツ社会学講座」新設の可能性が見えたこと、そして、新設が実現した（1996年）ことの反映である。

現在も続いている「ゲスト研究会」についてもふれておこう。スポーツ分野以外の研究成果に学びつつ、自らの研究への示唆を得るという目的で継続的に実施されてきているが、これまでの顔ぶ

れを概観すると、第一に、学内の多くの研究者に登場していただいていることがある。その研究領域の多彩さによってわれわれの研究に多くの刺激を与えられたと同時に、協力いただける関係を幅広く築くことの重要性を感じるところである。第二に、川本信正、清川正二、高原須美子という、一橋大学の大先輩であると同時に、日本のスポーツの歴史を語る上で、大きな足跡を残された方々をお招きし、お話を伺った貴重な記録が残されていることはひとつの誇りである。第三に、海外の研究者による講演記録も、国・地域、内容等、多岐にわたり掲載されている。これは、各スタッフの外国研究が進む中での人的なネットワークの広がりを反映している。第四に、学外の第一線の研究者をお招きした研究会の記録も数多く蓄積されている。

(尾崎 正峰)

『研究年報 1982～2002 』 (No.1～21)

『一橋大学スポーツ研究 2003～2011』 (No.22～30)

研究年報 1982－国民スポーツ研究の課題と方法－

I. 国民スポーツ(運動)研究の 80 年代前半の課題	2
81 年夏季相模湖研究合宿報告	
II. スポーツの社会史の可能性	11
82 年春季仙石原研究合宿報告	
III. 国民スポーツ研究の成果と課題 (月例研究会のまとめと展望)	18
1. 現代日本における国民スポーツ研究の基礎視角	18
2. 政策・制度研究 (第 1 グループ)	19
3. 組織・運動研究 (第 2 グループ)	21
4. 運動文化 (第 3 グループ)	23
5. 82 年度研究会運営にむけて	
IV. 資料	
1. 81 年度活動日誌	29
2. 体育・スポーツ関係新聞連載記事	30

研究年報 1983－国民スポーツと主体形成－

はじめに	1
I. 先進資本主義諸国におけるスポーツ研究の動向	3
82 年秋季相模湖研究合宿報告	
II. コミュニケーション論からみたスポーツの社会史	11
83 年春季箱根研究合宿報告	
III. スポーツの全社会 (史) 的究明と主体形成 (月例研究会のまとめと展望)	23
1. 基礎視角	23
2. 政策・制度研究 (第 1 グループ)	23
3. 組織・運動研究 (第 2 グループ)	26
4. 運動文化研究 (第 3 グループ)	31

IV. 資料	
1. 82 年度活動日誌	31
2. 体育・スポーツ関係新聞連載記事	35

研究年報 1984－国民スポーツ研究の展開－

はじめに	1
I. 外国研究の視点と方法　―スポーツの現代史に向けて―	4
83 年秋季相模湖研究合宿報告	
II. スポーツの本質究明と主体形成	13
84 年春季箱根研究合宿報告	
III. スポーツ・文化・社会　（研究のまとめと展望）	31
1. 運動文化と主体形成	31
2. 社会とスポーツ・スポーツ運動	34
IV. 現代のスポーツ動向　（時事問題検討会のまとめ）	40
1. 83 年前半期の特徴	40
2. 83 年後半期の特徴	43
V. 研究活動の概要	
1. 研究活動の特徴	45
2. 研究会の運営体制	45
3. 83 年度活動日誌	46
VI. 資料　体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧	47

研究年報 1985－各国研究・スポーツの起源論－

はじめに	1
I. 外国研究の視点と方法	3
84 年秋季相模湖研究合宿報告	
II. スポーツの本質究明　―その起源説をめぐって―	12
85 年春季箱根研究合宿報告	
III. スポーツ・文化・社会　（研究のまとめと展望）	26
1. 運動文化と主体形成	26
2. 社会とスポーツ・スポーツ運動	30
IV. 現代のスポーツ動向　（時事問題検討会のまとめ）	35
1. 第 2 グループ（'84.6.12）	35
(1)ロス五輪不参加問題を考える視点 (2)伊藤高弘報告　新スポーツ法案他 (3)討論	
2. 第 1 グループ（'84.9.25）	37
(1)「臨教審」の教育改革をいかにみるか (2)子どもとスポーツ (3)ロス五輪より	
3. 第 2 グループ（'84.11.13）	40
(1)日韓スポーツ交流とソウル五輪 (2)最近の体育関係雑誌の分析	
4. 第 1 グループ（'84.12.18）	41
(1)教育関係雑誌最新号より (2)スポーツ、体育関係雑誌 1984 年 12 月概観	
(3)五輪選手大麻事件に関する新聞論調とその分析	
V. 研究活動の概要	44
VI. 資料　体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧	46

研究年報 1986ースポーツの現代的展開ー

はじめに	1
I. 外国研究とは何か	3
85年秋季箱根研究合宿報告	
II. 近代スポーツ像の検討	14
86年春季箱根研究合宿報告	
III. スポーツ・文化・社会（研究のまとめと展望）	29
1. 運動文化と主体形成	29
2. 社会とスポーツ・スポーツ運動	34
IV. 現代のスポーツ動向（時事問題検討会のまとめ）	40
1. 第2グループ（'85.6.11）「反映」の承認か、否定か	40
2. 第1グループ（'85.11.26）東京都体育・スポーツ施設「委託」化問題	42
V. 研究活動の概要	44
VI. 資料 体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧	45
VII. H. J. タイヒラー氏を迎えて	48

研究年報 1987ー現代とスポーツの変革ー

はじめに	1
I. スポーツにおける「改革」とは何か	3
86年秋季相模湖研究合宿報告	
II. 現代の課題と研究構想	9
87年春季相模湖研究合宿報告	
III. スポーツ・文化・社会（研究会のまとめと展望）	22
1. 運動文化と主体形成	22
2. 社会とスポーツ・スポーツ運動	28
IV. 現代のスポーツ動向（時事問題検討会のまとめ）	32
1. 第2グループ（'86.6.10）体協「新スポーツ憲章」の検討	32
2. 第1グループ（'86.9.30）	34
(1)日本体育協会の財政構造	34
(2)文部省体育局の体育スポーツ予算	35
(3)“格技”から“武道”へ	35
3. 第1グループ（'86.11.25）第10回アジア大会	36
4. 第2グループ（'87.2.24）	37
公共スポーツ施設とその業務の「民営化」をめぐって	37
V. 研究活動の概要	39
VI. 資料 体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧	41
VII. シンポジウム	
「I O C体制と現代スポーツ」 講師：川本信正・清川正二	43

研究年報 1988ーポスト臨教審下の体育・スポーツ動向ー

はじめに	1
I. 外国研究の現代的意義	4

1987 年秋季箱根合宿報告	
1. スポーツインターナショナル史研究・序説（上野卓郎）	4
2. 両大戦間・戦中期のフランスのスポーツ運動の研究（伊藤高弘）	7
3. セントポール市におけるコミュニティー・レクリエーション活動の概要とその特徴（川口智久）	10
4. 在外研究計画（案）（早川武彦）	11
II. ポスト臨教審下の体育・スポーツ動向－政官財の 21 世紀構想と我々の課題－	13
1988 年春季箱根合宿報告	
1. スポーツイデオロギー：支配的イデオロギーの分析とスポーツ観の問題（上野卓郎）	13
2. スポーツ政策の動向－政府・財界のスポーツ戦略－（関春南）	15
3. スポーツ運動について－新日本体育連盟を中心に－（内海和雄）	17
4. ポスト「臨教審」下の教育改革動向－教養審・教課審答申をどう読むか－（藤田和也）	19
5. 在外研究報告（その 1）（唐木國彦）	25
III. スポーツ・文化・社会（研究会のまとめと展望）	26
1. 運動文化と主体形成（第 1 グループ）	26
(1)日本の学生スポーツの問題点－日米比較より－（柴崎涼一）	26
(2)教科構造（体育と保健の関係）を考える－特に医学史を参考にして－（村上修）	27
2. 社会とスポーツ・スポーツ運動（第 2 グループ）	29
(1)「国際スポーツ統一戦線」形成前史の研究（上野卓郎）	29
(2)生活・スポーツの社会化と変革主体の形成（高津勝）	31
3. 身体・健康と主体形成（第 3 グループ）	33
トレーニング理論の今日的動向と課題（山本唯博）	33
IV. 現代のスポーツ動向（時事問題検討会のまとめ）	36
1. 第 1 グループ	36
(1)有明コロシアムの完成と“みんなのスポーツ”（川口智久）	36
(2)臨教審『第三次答申』「スポーツと教育」について（関春南）	37
2. 第 2 グループ	38
(1)「積極的産業調整」とレジャー、スポーツ（高津勝）	38
(2)「生涯スポーツ」論の論調と問題点（早川武彦）	39
(3)スポーツ行政の民間委託化の実状－横浜市スポーツ振興事業団を中心に－（広畑成志）	40
3. 第 3 グループ	41
教課審答申・「教育課程の基準の改善について」の検討（藤田和也）	41
V. 研究日誌	42
VI. 資料 体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧	43
VII. ゲスト研究会	46
スポーツの国際化とスポーツビジネス（加藤克雄）	

研究年報 1989-90 年代のスポーツ運動と体育・スポーツ論－

はじめに	1
I. 90 年代のスポーツ運動と体育・スポーツ論	
1989 年春季相模湖合宿報告	
1. 現代のスポーツイデオロギーとスポーツ論	上野 卓郎… 4
2. 90 年代をめざす民主的スポーツ運動の現状と課題	伊賀野 明… 6
3. ポスト臨教審下の学校体育「改革」	
(1)保健体育指導要領下の問題と課題	

——高校保健体育の改訂の問題点を中心に——	藤田 和也	8
(2)大学体育の課題		
①臨教審答申と大学体育 —確かなスポーツ思想形成のために—	川口 智久	11
②新制大学における「一般体育」の制度化について		
——「非制度史」的問題提起——	高津 勝	12
4. 討論のまとめ	関 春南	13
II. 現代社会のスポーツ動向と学校体育		
1988 年秋季相模湖合宿報告		
1. オリンピック運動におけるソウル五輪の位置	広畑 成志	16
2. 学習指導要領改訂の問題点—小学校体育・中学校保健体育の改訂—	藤田 和也	19
3. 外国研究について	唐木 國彦	22
4. 事前学習会		
(1)生涯学習社会の検討課題—都市計画との関係で—	安藤 聡彦	24
(2)韓国の経済発展とオリンピック	鄭 秀溶	25
III. スポーツ・文化・社会 (研究会のまとめと展望)		
1. 大日本武徳会の政治的機能	坂上 康博	27
2. 子どものスポーツと部活—中学校における「部活」問題を考える—	藤田 和也	29
3. 今日のスポーツ権によせて	広畑 成志	29
4. 文化としてのスポーツ—スポーツとは何かを考える—	関 春南	32
IV. 現代のスポーツ動向 (時事問題検討会のまとめ)		
1. 「部活」問題を考える—若干の問題整理—	藤田 和也	35
2. 青少年の組織的スポーツ活動		
——1970 年代後半～80 年代前半の政策動向——	高津 勝	36
3. 最近のスポーツ論の一つの傾向	関 春南	36
4. ソ連スポーツのペレストロイカについて	唐木 國彦	37
5. スポーツの国際関係と最近の動向		
——とくに第 28 回 F S G T 全国総会に参加して考えたこと——	伊藤 高弘	38
6. 1989 年初頭のスポーツ情勢	上野 卓郎	39
V. 88 年度活動日誌		41
VI. 資料 体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧		42
編集後記		

研究年報 1990—大企業のスポーツ参入とスポーツ運動の理論—

はじめに		1
I. 今日のスポーツ政策と民活路線		
——1989 年秋季相模湖合宿報告——		
1. 21 世紀に向けたスポーツ政策		
——「保体審審議まとめ」と「保体審答申 72」——	関 春南	4
2. 東京の民活路線	内海 和雄	7
3. Y.M.C.A.の管理・運営—在日本韓国 Y.M.C.A.の場合—	新村 博信	9
4. (資料)「スポーツ産業の現在」	尾崎 正峰	10
※ 討論のまとめ	上野 卓郎	11
5. 在外研究計画		

School Nurse の制度・養成・役割に関する研究および 保健教育の実態と理論動向の把握	藤田 和也	14
II. 大企業のスポーツ参入とスポーツ運動の理論 ——1990 年春季相模湖合宿報告		
1. 大企業のスポーツ参入		
(1) 公的施設の非利便性と民間クラブの拡大	川口 智久	16
(2) 異業種のスポーツ部門参入—資料収集状況と研究の課題—	尾崎 正峰	16
2. スポーツ運動の理論		
(1) スポーツ運動研究の視座	関 春南	18
(2) 新体連第 18 回全国総会決議の到達点	和食 昭夫	21
(3) スポーツ運動史研究の構想	伊藤 高弘	22
※ 討論のまとめ	上野 卓郎	23
III. 西ドイツ戦後スポーツ（史）研究をめぐる諸問題 ——日本における研究状況とその批判的検討——	高津 勝	26
コメント：体育・スポーツ研究における主張と批判	川口 智久	30
IV. スポーツの行政と法	内海 和雄	31
コメント：内海報告「『戦後スポーツの法と行政』研究の現代的課題」を受けて	尾崎 正峰	35
V. 学生競技者の最低学力基準設定の意味と影響 ——Bylaw 5-1- (j)改訂と黒人問題——	川口 智久	36
コメント：アメリカの学校スポーツの現状と日本との比較検討	柴崎 涼一	40
VI. 「生涯スポーツ」をめぐって	尾崎 正峰	41
コメント：大いなる飛翔への蓄積を！	関 春南	44
VII. 89 年度活動日誌		45
VIII. 資料 体育・スポーツ関係新聞連載記事一覧		46
編集後記		

研究年報 1991—転換期のスポーツ～日本とヨーロッパ～

はじめに	高津 勝	1
I. 日本スポーツの現状		
1. 政府・財界のスポーツ戦略	関 春南	3
2. 今日の財界戦略と対抗軸	寺西 俊一（上野卓郎）	11
3. 「生涯スポーツ」とスポーツ産業	尾崎 正峰	14
II. ヨーロッパスポーツの現状		
1. 壁崩壊までの東ドイツのスポーツ・システム —その歴史・社会学的研究のための予備的研究—	上野 卓郎	15
2. 「革命」後の東欧スポーツ —現地調査中間報告—	唐木 國彦	19
3. フランス・スポーツ社会学研究の動向 —在外研究報告—	早川 武彦	23
4. スポーツの危機とスポーツ社会学 —早川報告によせて—	川口 智久	32
III. 大学における性教育	村瀬 幸浩	34
IV. 研究活動の概要		38
V. 資料		39
テーマ設定の趣旨	関 春南	42
編集後記		

研究年報 1992 —スポーツの市場化とスポーツ権—

はじめに	内海 和雄	1
I. スポーツの市場化と公共性		
1. ドイツ連邦共和国におけるスポーツの市場化とスポーツ運動・システム	高津 勝	3
2. スポーツ産業の戦後課程	尾崎 正峰	7
3. スポーツの商業的利用にたいする対応について	伊賀野 明	11
4. スポーツの公共性の諸問題 ～イギリスにおけるスポーツ政策を事例として～	内海 和雄	15
II. 転換期のスポーツ運動		
1. 東ヨーロッパのスポーツ運動の現状	唐木 國彦	20
2. 激動する世界と労働者スポーツ運動（2） ～積極的な内政・外交政策を展開する F S G T～	伊藤 高弘	24
3. 現代の国際労働者スポーツ運動 ～国際スポーツ運動と C S I T～	上野 卓郎	26
4. 「ニュースポーツ」の胎動 ～新たな運動文化の登場か～	早川 武彦	32
III. スポーツ権論の現代的展開		
1. 内海「スポーツ権」論の研究方法について ～その批判的検討～	関 春南	36
2. 日本の政党のスポーツ政策 ～日本共産党の場合～	川口 智久	42
3. 人間の主体性と人権による拘束 ～最近の人権論の傾向と問題点～	浦田 一郎	44
IV. 91年度研究会日誌		48
V. 資料		49
編集後記		

研究年報 1993 —スポーツ社会学の新展開—

はじめに	内海 和雄	1
I. 論考		
1. イギリスのスポーツ政策② —その歴史と理念—	内海 和雄	3
2. ゴールデン・プラン実現の歴史的・社会的条件	関 春南	8
3. テレビ・スポーツについて	川口 智久	12
4. ドイツにおけるサッカーのプロ化 —スポーツ・メディア・商業化—	高津 勝	16
5. 近代スポーツから現代スポーツへの胎動 —そのラフスケッチ—	早川 武彦	20
II. 研究ノート		
1. 東欧スポーツの現状	唐木 國彦	27
2. アイヒベルクのスポーツ空間史論	上野 卓郎	31
3. 在外研究活動報告 —アメリカの学校保健とスクールナース—	藤田 和也	35
III. 時事問題		
1. 「レジャー白書 '92」について	高津 勝	37
2. 生涯学習審議会「中間まとめ」	唐木 國彦	39
IV. ゲスト研究会 現代社会における遊びの意義	尾関 周二	41
V. 討論の窓 「スポーツ所有論」と「権利・公共性」 —関氏への反論—	内海 和雄	47
VI. 文部省科学研究 各国の国民スポーツ	研究部	52
VII. 92年度研究会日誌		53
VIII. 資料		54

研究年報 1994 - 「Sport for all」の思想と運動 -

はじめに	早川 武彦	1
I. 論考		
1. ドイツにおけるサッカーのプロ化 - 問題の把握とヘゲモニー論の射程 -	高津 勝	3
2. テレビジョン時代とスポーツ	川口 智久	7
3. 「近代スポーツ」から「現代スポーツ」への胎動 (II)	早川 武彦	11
4. 「社会主義的スポーツ」の崩壊	唐木 國彦	19
5. 市民のスポーツ活動とスポーツ意識	藤田 和也	23
II. 研究ノート		
1. 論文の検討過程ノート	関 春南	28
2. スポーツ・インター史と「バルセロナ人民オリンピック」の研究	上野 卓郎	30
3. 生涯学習政策の動向	尾崎 正峰	34
4. An intercultural comparison of human movement behavior - Speechless, but not motionless -	H. Polster	38
5. 第2回スポーツ産業学会参加記	早川 武彦	44
6. スポーツ社会学会の動向	唐木 國彦	46
III. 時事問題検討会		48
IV. ゲスト研究会 日本スポーツの現状と展望	高原須美子	49
V. 93年度研究会日誌		57
VIII. 資料		58
編集後記		

研究年報 1995 - 近代スポーツから現代スポーツへ -

はじめに	関 春南	1
I. スポーツ論		
1. 近代スポーツ批判 - その研究史概観 -	早川 武彦	3
2. 「やわらかいスポーツ」の特質について	唐木 國彦	17
3. 第2次大戦後のポーランドにおけるスポーツ	B. Woltmann	22
4. スポーツ実践と「レクリエーション」	川口 智久	25
II. スポーツ史論		
1. 研究ノート：民衆スポーツ史の構想	高津 勝	27
2. 一橋大学運動部活動と日本のスポーツ展望	川本 信正	37
3. 研究方法論覚書	関 春南	53
4. 人民スポーツ思想・運動史、スポーツ現代史研究にむけた 第2次長期在外研究計画	上野 卓郎	55
III. 政策論 他		
1. イギリスのスポーツ政策	I. Henry	57
2. 「新学力・評価観」体制と体育実技	内海 和雄	65
3. Experiences in sport and the level of motor abilities of Japanese university students	H. Polster	73
4. 現代の学生の精神衛生	稲村 博	81
IV. 94年度研究会日誌		91

V. 資料	92
編集後記	

研究年報 1996 —スポーツ社会学の対象と方法—

はじめに	関 春南	1
I. スポーツ社会学研究		
1. スポーツ社会学研究の対象と方法	早川 武彦	3
2. 「スポーツの社会学」について考える	高津 勝	9
II. 「スポーツ社会学」を読む		
1. わが国の揺籃期のスポーツ社会学	唐木 國彦	13
2. 森川貞夫『スポーツ社会学』の研究対象、研究方法について	関 春南	15
3. 松村和則『地域づくりとスポーツの社会学』の研究対象、研究方法について —「スポーツ社会学」としてどう読めるか—	内海 和雄	18
4. 『スポーツは誰のために』をめぐって	尾崎 正峰	21
III. 社会学からのアプローチ		
1. 社会学とスポーツ研究	矢澤修次郎	23
2. 批判的スポーツ理論の可能性 —D.ジェリー他編『スポーツ・レジャー社会学』所収論文の検討—	鬼丸 正明	36
3. 文献紹介		
①「社会学的問題としてのスポーツの発生」 N.エリアス『スポーツと文明化』の紹介	早川 武彦	40
②多木浩二『スポーツを考える』—身体・資本・ナショナリズム—	内海 和雄	44
IV. スポーツ社会学の周辺		
1. 保健社会学の対象と方法をめぐって —関連分野の研究領域と方法の文献解題的検討—	藤田 和也	47
2. THE STRUCTURE OF RESEARCH IN THE FORMER GDR SPORT SCIENCE	H.Polster	52
V. 時事問題		
1. スポーツ調査を読む	尾崎 正峰	59
2. メディア論の現状とスポーツ理論の課題	鬼丸 正明	63
VI. 95年度研究会日誌		67
VII. 資料		68
編集後記		

研究年報 1997 —スポーツとグローバリゼーション—

はじめに	上野 卓郎	1
I. スポーツとグローバリゼーション		
1. 国際スポーツ組織のネットワーク	早川 武彦	3
2. スポーツ研究とグローバリゼーション	上野 卓郎	7
3. もう一つの36年ベルリン対抗競技会の会見 —アルヒーフ資料による国際スポーツ（政策）運動史研究から—	上野 卓郎	14
4. 国際法とスポーツ —スポーツ選手の人権問題—	佐藤 哲夫	20
II. スポーツ社会学構想		

1. スポーツ社会学とスポーツ史認識	高津 勝	36
2. 「スポーツ問題」の社会学	関 春南	42
3. 「スポーツ社会学」の講義をどう構想するか ー講義で何を伝えるのかー	尾崎 正峰	45
4. スポーツ部活動行政の現状と課題	内海 和雄	49
III. 研究ノート		
1. スポーツの国際化とナショナリズム・コマーシャルリズム	早川 武彦	54
2. 民俗舞踊と地域アイデンティティー ー沖縄の民俗舞踊エイサーの事情ー	岡本 純也	59
IV. 唐木國彦氏を追悼する		
1. やわらかいスポーツ論ーその思想史的考察ノートー	早川 武彦	63
2. 唐木國彦氏のドイツ・スポーツ研究によせて	高津 勝	72
3. 先行・共同研究者としての故唐木教授の達成と学問的不備	上野 卓郎	77
4. 故唐木國彦教授業績目録	渡辺 富子	78
V. 96年度研究会日誌		82
VI. 資料		83
編集後記		

研究年報 1998ースポーツとグローバリゼーションⅡー

はじめに	上野 卓郎	1
I. スポーツとグローバリゼーション		
1. ICASと長野CAS裁定	上野 卓郎	3
2. 企業の国際戦略とスポーツ	米倉誠一郎	7
3. 国際メディア戦略としてのスポーツビジネス：メディアスポーツ	早川 武彦	25
4. ヨーロッパのスポーツ政策と組織	内海 和雄	35
5. 障害者スポーツにおけるグローバリゼーション ー障害者スポーツの国際的団体の組織化と長野パラリンピクー	尾崎 正峰	42
6. ドイツ戦後改革とスポーツの「グローバリゼーション」	高津 勝	48
II. 研究ノート		
1. 「保健体育審議会答申」（1997年9月）の批判的検討	関 春南	52
2. 社会学における身体論 ージョン・オニール『語りあう身体』（1992、紀伊國屋書店）を読むー	藤田 和也	57
3. 国際化とローカリティー：「民俗舞踊と地域アイデンティティーⅡ」	岡本 純也	61
III. 97年度研究会日誌		68
VI. 資料		69
編集後記		

研究年報 1999ー現代スポーツの新展開ー

はじめに	高津 勝	1
I. 現代スポーツの新展開		
1. 「スポーツ」史像の再検討 ースポーツのグローバリゼーションと「民俗」「民衆」ー	高津 勝	3
2. 「スポーツの近代化」と「民俗舞踊の近代化」	岡本 純也	16

3. 「日本型」地域スポーツクラブは構想・実現できるのか？ ー文部省「総合型地域スポーツクラブ」の概要と検証の視点ー	尾崎 正峰	28
4. メディア・スポーツ研究と公共圏論 ～批判的スポーツ理論におけるメディア研究	鬼丸 正明	34
5. イギリス福祉国家とスポーツ・フォー・オール政策 ～多国籍企業化とグローバリゼーションとの関わりで～	内海 和雄	40
II. 研究ノート		
1. 障害を持つ人々のスポーツの動向 ～資料紹介ー「障害者スポーツに関する懇談会報告」～	尾崎 正峰	50
2. 日独スポーツ関係史資料発掘覚書	上野 卓郎	54
III. 時事問題		
1. 新自由主義「改革」下の教育政策	藤田 和也	60
2. もう一つの NIKE 戦略と日本のマスコミ	早川 武彦	66
3. 日本体育協会における「国民スポーツ組織論」について ー『スポーツ人口実態調査統括報告書』の検討ー	関 春南	73
VI. 国内・国際交流		
1. 身体と規範ーポストナショナルのスポーツー	辻内 鏡人	78
2. スポーツタイゼーションとグローバリゼーション ～過程社会学的視野～	ジョセフ・マグワイヤー	102
3. ドイツにおけるスポーツ史研究の今日的状況について (Dr.Joachim K.Rühl)	関 春南	110
V. 98 年度研究会日誌		111
VI. 資料		112
編集後記		

研究年報 2000ースポーツのグローバリゼーションと多元性ー

はじめに	高津 勝	1
I. スポーツのグローバリゼーションと多元性		
<論考>		
1. スポーツの 90 年代像ー新たな統計資料を中心としてー	内海 和雄	3
2. 身体競技・祝祭・民俗ー相撲史の再構成と近代スポーツ像の再検討ー	高津 勝	12
3. 「公共圏」論の現状と「スポーツ公共圏」論の可能性	鬼丸 正明	22
<研究ノート>		
1. テレビの放映権料高騰と放送・通信業界の再編	早川 武彦	30
2. “現代スポーツ”の概念的把握のための視座について	関 春南	42
3. 「地方分権」の動向と住民参加の行方	尾崎 正峰	46
4. 『第三帝国の国際スポーツ政策』(タイヒラー)の翻訳	上野 卓郎	54
<国際交流>		
1. ドイツにおけるスポーツクラブの現状と課題	ゲオルグ・アンデルス	55
2. 中国のスポーツと体育：その改革の過程	ロビン・ジョーンズ	64
3. グローバリゼーションとスポーツ統治：国民国家・欧州連合そして市	イアン・ヘンリー	74
II. 教育論の動向		
1. 実践教育における正統的周辺参加	岡本 純也	82

2. 教育実践論の立場から「臨床教育学」の提唱を検討する	藤田 和也	88
III. ゲスト研究会		
企業社会日本の再構成	渡辺 治	96
IV. 99年度研究会日誌		121
V. 資料		122
編集後記		

研究年報2001ースポーツのグローバリゼーションとローカリゼーションー

はじめに	早川 武彦	1
I. スポーツのグローバリゼーションとローカリゼーション		
＜論考＞		
1. スポーツのグローバリゼーションとローカリゼーション	岡本 純也	3
2. 公共圏と親密圏—スポーツ社会学及び社会学における公共圏論の動向—	鬼丸 正明	9
3. 埼玉県浦和市のスポーツ行政	内海 和雄	15
4. 「スポーツ振興基本計画」とスポーツクラブの問題	関 春南	21
＜研究ノート＞		
1. シドニー・オリンピックを「読む」		
—スポーツ研究とカルチュラル・スタディーズ—	高津 勝	27
2. モスクワ・アルヒーフ資料によるスポーツインター史の最新研究		
—アンドレ・グノの2つの論文について—	上野 卓郎	31
3. スポーツ産業論～私論	早川 武彦	35
4. 「障害者スポーツ」における「統合」の問題・序説	尾崎 正峰	39
＜国際交流＞		
1. イングランドの中等学校における運動とスポーツ促進上の諸問題	ローレーヌ・ケール	43
2. レジャー研究、レジャー政策そして社会的市民権		
：福祉の失敗あるいは福祉の限界？	フレッド・コールター	48
II. ゲスト研究会		
グローバリゼーションのローカルな基盤 —支配と対抗の両義性—	町村 敬志	53
III. 2000年度研究会日誌		67
IV. 資料		68
編集後記		

研究年報2002ー21世紀のスポーツの課題へ向けてー

はじめに	早川 武彦	1
I. 21世紀のスポーツの課題へ向けて		
＜論考＞		
1. 身体競技の歴史的・社会的な多様性と重層性		
ーローカルな視座から「近代スポーツ」を問うー	高津 勝	3
2. 市場化と公共化の対抗 ー90年代のスポーツ政策ー	内海 和雄	13
3. オリンピックの象徴・概念		
ーより早く、より高く、より強く：Citius,Altius,Fortiusー	早川 武彦	21
4. 公共圏とデジタル・ネットワーキング	鬼丸 正明	30
5. スコットランドの観光産業における伝統スポーツ・民俗舞踊	岡本 純也	36

6. 学校の本来の機能としての養護機能	藤田 和也	43
<研究ノート>		
1. 民衆的視点から「21世紀のスポーツのゆくえ」を考える		
ー01.10.14 シンポを司会してー	上野 卓郎	52
2. 「オーストラリアのスポーツと社会」研究の視座	尾崎 正峰	54
3. サッカーファンがもたらしたもの		
ー2002FIFAW 杯をめぐるサポーター・ボランティアグループの活動ー	坂 なつこ	58
II. ゲスト研究会		
事業型 NPO の現状と課題	谷本 寛治	62
III. 2001年度研究会日誌		
編集後記		74

一橋大学スポーツ研究 2003 (Vol.22)

ーグローバルゼーションとスポーツの諸相ー

はじめに	尾崎 正峰	1
I. グローバリゼーションとスポーツの諸相		
<論考>		
1. グローバリゼーション・文化・スポーツ	鬼丸 正明	3
2. スポーツと新しい社会運動の可能性 ー新潟 Alliance2002 を例にー	坂 なつこ	11
3. グローバル化時代の文化政策ー権限委譲後のスコットランドの事例ー	岡本 純也	21
4. プロ・スポーツ論 ープロ・スポーツとスポーツの公共性ー	内海 和雄	27
5. 「和船競漕」考 ー社会史的アプローチー	高津 勝	35
6. メガ・メディアの崩壊と欧州サッカークラブの財政的危機	早川 武彦	45
<研究ノート>		
1. 進化するオーストラリアのスポーツ研究	尾崎 正峰	53
2. 1936年バルセロナ人民オリンピックをめぐり歴史像 ー報告要旨ー	上野 卓郎	57
3. 養護教諭の教育実践分析の方法試論ノート		
ー実践分析から実践理論の構築へー	藤田 和也	61
II. ゲスト研究会		
朝鮮のナショナリズム	糟谷 憲一	65
III. 2002年度研究会日誌		
編集後記		85

一橋大学スポーツ研究 2004 (Vol.23)

ーグローバルゼーションとスポーツの諸相 IIー

はじめに	尾崎 正峰	1
I. <論考>		
1. スポーツインターナショナルとコメンテルン	上野 卓郎	3
ーモスクワ・アルヒーフ調査に基づいてー		
2. メディアスポーツ・「生活」・公共圏	鬼丸 正明	11
3. ケーブル TV (CATV) と地域スポーツ振興	早川 武彦	19

4. 文明化論再考ーグローバルゼーションにおけるエリアスとスポーツ	坂 なつこ	27
5. 大学スポーツが抱える今日の問題	岡本 純也	35
II. <研究ノート>		
1. F. コールターの「福祉とスポーツ政策」	内海 和雄	41
2. オーストラリアのスポーツ政策の“源流” ー「ブルームフィールド報告」で示されているものー	尾崎 正峰	45
3. フィールドワーク：玉江浦の和船競漕ー「おしくらごう」	高津 勝	49
4. Sports Management and The Coaching of Sports in Germany and Japan ーpersonal Experiences	Polster Harald	57
III. 特別報告		
グローバル化・新帝国・スポーツー社会学の最前線ー	庄司 興吉	61
IV. 2003年度研究会日誌		82
編集後記		

一橋大学スポーツ研究2005 (Vol.24)

ースポーツのグローバルゼーションとローカリゼーション再論ー

はじめに	内海 和雄	1
I. <論考>		
1. “メディアスポーツ”その概念について ースポーツの本質にねざすメディアスポーツ論に向けてー	早川 武彦	3
2. メディアスポーツと映像分析ー予備的考察	鬼丸 正明	13
3. シマの身体から沖縄の身体へーエイサーを踊る身体の歴史ー	岡本 純也	21
4. アイルランドにおけるスポーツ ーゲーリック・アスレティック・アソシエーションを例にー	坂 なつこ	29
5. オリンピックと資本主義社会ー第一報 問題状況と研究計画	内海 和雄	39
II. <研究ノート>		
1. ディーププレイー玉江浦の「おしくらごう」 ー先行研究の紹介と検討を中心にー	高津 勝	49
2. スポーツ、移民、エスニシティーオーストラリアの研究動向からー	尾崎 正峰	57
3. スポーツインターナショナルとコミンテルン ーモスクワ・アルヒーフ調査に基づいてー（その2）	上野 卓郎	63
III. 2004年度研究会日誌		69
編集後記		

一橋大学スポーツ研究2006 (Vol.25)

ー「越境するスポーツ」へのアプローチー

はじめに	内海 和雄	1
I. <論考>		
1. スポーツ・映像・社会	鬼丸 正明	3
2. ナショナリズムとグローバルゼーション ーアイルランドのスポーツを例にー	坂 なつこ	11

3. シマの身体から沖縄の身体へ II —ヤマトウへの普及過程—	岡本 純也	19
4. アマチュアリズム論 —差別なきスポーツ理念の探求—	内海 和雄	27
II. <研究ノート>		
1. 萩地方における各浦対抗和船競漕会の試み —萩住吉神社県社昇格記念和船競漕会（昭和8年）を中心に—	高津 勝	33
2. オーストラリアにおけるサッカーの「プロ化」の動向と背景	尾崎 正峰	39
3. スポーツインターナショナルとコミンテルン —モスクワ・アルヒーフ調査に基づいて— その3	上野 卓郎	43
III. 特別報告		
How can we study sport from a sociological perspective?		
Methodological questions and empirical findings from the social world of football		
Dr. Darius Zifonun		
IV. ミニシンポジウム：研究動向を共同で探る		
	上野 卓郎 高津 勝 尾崎 正峰	57
V. 2005年度研究会日誌		63
編集後記		

一橋大学スポーツ研究2007 (Vol.26)

—スポーツのグローバル化とローカル化の交点—

はじめに	高津 勝	1
I. <論考>		
1. アイルランドにおけるポストコロニアリズムとスポーツ	坂 なつこ	3
2. 「帝国」の形成と「民衆」の身体競技 —日露戦後の「地方青年団体」の組織化に関連して—	高津 勝	11
3. シマの身体から沖縄の身体へ III —都市の中の民俗舞踊—	岡本 純也	19
4. 日本学生野球協会の成立と「学生野球基準要綱」の制定 —学生スポーツの理念における商業主義と教育—	中村 哲也	25
5. 「ソーシャル・キャピタル」：スポーツ論への可能性	鬼丸 正明	33
II. <研究ノート>		
1. オリンピック招致と都市	尾崎 正峰	41
2. 資本主義社会とオリンピック③—日本資本主義とオリンピック招致—	内海 和雄	47
3. もう一つの戦後ドイツ・スポーツの成立史	上野 卓郎	53
III. 2006年度研究会日誌		57
編集後記		

一橋大学スポーツ研究2008 (Vol.27)

—スポーツのグローバル化とローカル化の交点 II—

はじめに	上野 卓郎	1
I. <論考>		
1. アイルランドとヨーロッパ —ヨーロッパにおけるスポーツ政策とアイルランド（その1）—	坂 なつこ	3

2. オリンピックの批判・否定論の検討	内海 和雄	11
3. プレイ論か公共圏論か—スポーツ社会学の理論的実践的問題—	鬼丸 正明	19
4. 地域スポーツと学校開放	尾崎 正峰	27
II. <研究ノート>		
1. 赤色スポーツインターナショナル成立史	上野 卓郎	35
2. 英国における「スポーツイベントによる都市再生」 —シェフィールド市を事例にして—	金子 史弥	41
3. 日本におけるスポーツ受容 —「創られた伝統」と世界システム・国民国家・生活世界—	高津 勝	49
4. 民俗舞踊の「型」の保存と演技の共同体 —エイサーの伝承組織と村踊りの伝承組織の比較—	岡本 純也	57
III. 特別報告		
観光リゾートとしての沖縄イメージの誕生：沖縄海洋博と開発の知	多田 治	61
IV. 2007年度研究会日誌		67
編集後記		

一橋大学スポーツ研究 2009 (Vol.28)

—グローバル化下のスポーツとコミュニティ—

はじめに	岡本 純也	1
I. <論考>		
1. スポーツ・ナショナリズム・公共圏 —アパデュライのポストナショナルなスポーツ論について—	鬼丸 正明	3
2. 人類史と「体力」—「摂取＝消費 2200Kcal 法則」—	内海 和雄	11
3. アボリジナルとスポーツ	尾崎 正峰	19
4. 明治後期における「一高野球」像の再検討 —一高内外の教育をめぐる状況に着目して—	中村 哲也	27
5. 消費社会におけるスポーツの価値の変容 —1960年代のボウリングを事例に—	笹生 心太	35
II. <研究ノート>		
1. アイルランド・スポーツにおけるジェンダー・女性研究にむけて	坂 なつこ	43
2. EU圏における地域スポーツの展開 —ミュンヘン市の事例—	高津 勝	49
3. 都市史とスポーツ史の交差 —ドイツ語圏都市史論集（2008年刊）から—	上野 卓郎	57
4. 地方分権化と観光政策 —グローバル化と地域文化の活性化—	岡本 純也	63
III. 特別報告		
健康戦略の転換 —病院からコミュニティへ—	猪飼 周平	67
IV. 2008年度研究会日誌		88
編集後記		

一橋大学スポーツ研究 2010 (Vol.29)

—グローバル化とスポーツの変容—

はじめに	岡本 純也	1
I. <論考>		
1. オーストラリアにおける「ラグビー」の拡大と分裂	尾崎 正峰	3
2. 太平洋戦争下のスポーツ奨励 ー1943年の厚生省の政策方針、運動用具および競技大会の統制ー	坂上 康博	11
II. <研究ノート>		
1. アイルランドにおけるスポーツとジェンダーイメージの変化について	坂 なつこ	19
2. 赤いウィーンの労働者オリンピック・1931年	上野 卓郎	25
3. 「観光資源」としてのスポーツ	岡本 純也	32
4. オリンピック日本代表選手団における学生選手に関する資料検討： ー1912年ストックホルム大会から1996年アトランタ大会までを対象にー	中澤 篤史	37
III. 特別報告		
日本近現代史研究にとってのスポーツ	高岡 裕之	49
IV. 2009年度研究会記録		65
1. 研究会報告記録		65
(1) スポーツプロモーションとは何か	鬼丸 正明	65
(2) 体育(学)から教育(学)を語るための課題と展望	中澤 篤史	67
2. 研究会日誌		69
編集後記		

一橋大学スポーツ研究2011 (Vol.30)

ーグローバルの過程とスポーツの変容ー

はじめに	岡本 純也	1
I. <論考>		
1. 武徳会パージの審査実態 ー審査結果の全体像と本部役員のパージを中心にー	坂上 康博	3
2. 「スポーツと開発」をめぐる諸問題 ー実行組織としてのNGOに関する包括的研究にむけてー	鈴木 直文	15
3. 「戦後日本の地域スポーツ転換のグラデーション」試論	尾崎 正峰	23
4. 学校運動部活動研究の動向・課題・展望 ースポーツと教育の日本特殊的関係の探究に向けてー	中澤 篤史	31
5. 高い競技力を有する実業団陸上競技部監督によるマネジメント ートップレベル19チームに対する定性的調査ー	中村 英仁	43
II. <研究ノート>		
1. EUとスポーツ政策	坂 なつこ	51
2. スポーツ研究と「統治性」	鬼丸 正明	57
3. 地域活性化策としてのスポーツ・ツーリズムの可能性	岡本 純也	61
III. 特別報告		
英国におけるスポーツ史研究のこれまでをふりかえって	市橋 秀夫	67
IV. 総目次『研究年報1982～2002』『一橋大学スポーツ研究2003～2011』		85
V. 2010年度研究会日誌／執筆者紹介		103
編集後記		